



## 障がい青年の自分づくりと二重の移行支援

渡部, 昭男

---

(Citation)

福祉事業型「専攻科」エコールK0BEの挑戦:183-209

(Issue Date)

2013-07

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003518>





第3部

# 障がい青年の 自分づくりと 二重の移行支援

特別寄稿●渡部昭男

## 1 ↓ 鳥取から神戸へ

鳥取大学での勤務に区切りをつけ、二〇一一年から神戸大学に赴任した。六甲山麓の研究室から見える神戸港や遥かに望む紀州の眺めは、ふるさと愛媛の記憶Ⅱみかん畑からの瀬戸内海や造船所の懐かしい光景と重なる。兵庫の特別支援教育にかかわる方々が、さっそく歓迎会を開いてくださった。

### ❖ ひゅーまんぼいす

私にとって兵庫といえば、一九九〇年代に高等部希望者全入運動を推し進めた「ひゅーまんぼいす」(山田優一郎代表)の取り組みがまず挙げられる。高等部入試で不合格者を出した養護学校に学術調査団を派遣し、地元新聞やテレビ局の取材を受け、「希望者全入実現!」の横断幕をかかげて神戸市役所まで風船パレードしたことなどが想い出される。

### ❖ 附属特別支援学校

次には、附属特別支援学校同士での実践交流が挙げられよう。私が鳥取大学附属の校長を務めてい

たとき（二〇〇二～〇五年度）に、神戸大学附属は発達保障労働や人間発達の経済学が専門の二宮厚美教授が校長であり、切磋琢磨して実践研究を進めた。鳥取大学附属の「自分づくり」を支援する学校―「生活を楽しむ子」をめざして―（明治図書、二〇〇五年）と相前後して、神戸大学附属でも井澤孝典副校長を先頭に『コミュニケーションの關係がひらく障害児教育―神大附属養護学校の教育実践―』（青木書店、二〇〇五年）がまとめられた。

## ❖エコールKOBÉ

そして、何といつても、エコールKOBÉを挙げねばなるまい。歓迎会には、「ひゅーまんほいす」や全国障害者問題研究会の活動ですでに存じ上げていた河南勝学園長や、WAPコーポレーションの岡本正社長も駆けつけてくださった。

校長二期目の二年間（二〇〇四～〇五年）、国立大学が二〇〇四年度から法人化されたことを逆にチャンスととらえて、かねてより構想を温めていた「高等部専攻科」を鳥取大学附属に開設する準備を進めた。その詳細は、渡部昭男『障がい青年の自分づくり―青年期教育と二重の移行支援―』（日本標準、二〇〇九年）に記したが、幸運にも鳥取大学法人、文部科学省、鳥取県教委や鳥取大学附属関係者の理解を得て、二〇〇六年度に鳥取大学附属養護学校（現・特別支援学校）に、国立養護学校としてはじめて高等部専攻科が実現した。

神戸大学での私の再出発がまさにエコールKOBÉの開校と重なったことに、運命的なものを感じる。「障がい青年の自分づくりと二重の移行支援」の実践研究に、神戸の地においても参与できる機

会を得たのである。

本書に収められた「エコールKOBÉの挑戦」は、まさに「芽吹く春」のイメージだ。そこには、生まれ出る息吹きと育ちゆく勢いがある。以下に、経営者目線から「地域での起業」、実践者目線から「創造と確信」、学生目線から「青春の謳歌」、をキーワードとして感じたところを綴ってみたい。

## 2 ↓ 地域での起業——「無から有を、私から公へ」

### ❖ 神戸の新長田に根差して

岡本社長の手記を読むと、エコールKOBÉは「神戸市長田区という地域での仕事起こし」、すなわち「地域での起業」であるとの感を強くする。

長田区といえば、山田洋次監督の「寅さん」シリーズの最終作「渥美清さんの遺作」となった第四八作「男はつらいよ 寅次郎紅の花」（一九九五年）を想起する。阪神・淡路大震災のあと、たまたま立ち寄った神戸で寅さんがボランティアをするという話が挿入されているが、あの障がい者作業所のパン屋は神戸市長田区の石倉夫妻が営む「くららベーカリー」がモデルである。

ところで、岡本社長は、新長田まちづくり株式会社との出会いにより、利便のいいJR

新長田駅前にあるビル（アスタプラザ）の地階に広いスペースを確保して、エコールKOB Eが開設できたことを記している。一方、エコールKOB Eの立ち上げにより新長田のエリアでは、駅前ビルの空き室が稼働し、職員や障がい青年をまじえて賑わいが増し、エコールわくわくフェスティバルや全国専攻科研究会の開催などで時々各地からの訪問者もある。

実践レベルにおいても、近隣の旧二葉小学校を活用して、調理の授業やサッカー部の活動がなされている。調理の食材を商店街で買い出す、学生たちが放課後に商店街で寄り道をする、地域の方が入学式や卒業式に参列する、地域の方々とフェスティバルやシネマを開催する等々もみられる。そして、「SOS！ 鉄人銀行」「スター誕生！ 鉄人商店街」（えこーる新喜劇）などのように、新長田をテーマとした文化がづくり出されてもいる。

エコールKOB Eの立ち上げは、地域に仕事を起こして雇用を生み、経済活動を活性化することにとどまらず、新たな学びや生活が地域で展開され、地域に根差した文化や交流を生むことにもつながっている。

### ❖ 権利保障の欠落を埋める

さらに、エコールKOB Eは、「権利保障の欠落を埋める営み」である。

エコールKOB Eの運営主体であるWAPコーポレーションは、株式会社である。株式会社とは、基本的には営利を目的とした組織であり、利益が生じれば株主に配当される。その株式会社が、「権利保障の欠落を埋める」事業に参入したのである。

岡本社長の手記とも重複するが、WAPコーポレーションの「エコールKOBÉ」のサイトには、「本来あるべき制度が社会的に欠如している」として、次のように書かれている。

大学全入の時代に突入した今、知的障害をもつ人たちだけが憲法や教育基本法の定めにも関わらず、平等の選択権が行使できない状況が当然視されている。特別支援学校高等部（高校）卒業後に「学び」を求める声は、本人、保護者とも非常に強いものがある。北欧などでは二〇歳までの障害者への教育は普通のものとなっている。

([http://www.kobe-ipc.or.jp/up\\_gd/gd\\_file\\_235\\_73887917.pdf](http://www.kobe-ipc.or.jp/up_gd/gd_file_235_73887917.pdf))

社名の「WAP」自体が「Welfare福祉とProsperity繁栄をAndでつなぐ」意味であったように、「社会に貢献する」「障害者の社会的自立を支援する」という社是にふさわしい事業を模索していたWAPコーポレーションにとって、「学びの作業所」との出会いが運命的であった。「私たちはソーシャルビジネス（社会貢献型企業活動）を通じて障害者の社会的自立を応援します!!」（192ページ記載のパネル①）と高らかに謳っている。

私は、かつて鳥取大学時代に、鳥取市鹿野町のまちづくり・地域おこしのために「株式会社ふるさと鹿野」(<http://www.shikano-net.com/company/>)が設立されたことを見聞きしており、さまざまな形で株式会社が公益性の高い事業に乗り出してくるであろう予感をもっていた。しかしながら、「学びの作業所」に社会福祉法人やNPO法人ではなく、株式会社が参入することは大変珍しいことである。

岡本社長が述べるように、「大きな夢」、理念や「非常に強い思い」があったからこそ、エコールKOB Eは生まれたのである。

先行する和歌山県においては、障害者自立支援法による自立訓練（生活訓練）事業の制度による限りは学校教育用語である「専攻科」の使用は認められず、あくまでも福祉事業Ⅱすなわち「作業所」である、という行政指導があった（したがって「学びの作業所」という呼称となっている）。この越えられなかった一線を、エコールKOB Eの場合は行政側の理解も得てクリアーし、「福祉事業型『専攻科』」と名乗っている。画期的なことである。

❖無から有へ、私から公へ

ところで、エコールKOB E設立に至るまでの「苦難」を思うと、立ち上げまでの数年、よくぞ辛抱され、がんばられたと思う。資本金が「右肩下がり」で減っていく時期の不安（恐怖）と後悔は、筆舌に尽くせぬものであったろう。

このあたりは、鳥取大学附属に高等部専攻科をつくった「苦労」とは、大きく異なる。

法人化したとはいえ国立大学附属校であったことから、学内合意や鳥取県との調整を進めて、文部科学省に「概算要求」を行い、財務省に認めてもらうというプロセスであった。確かに新たな課題に向かう対応の「苦労」はあったが（渡部二〇〇九、「開設の経緯」二〇～二七頁）、校長一人が全財産を投げ打って挑むというものではなく、失敗すれば「生活の糧」を失う危機感や恐怖感があったわけでもない。

「権利保障の欠落を埋める」取り組みはすべからく、「無から有へ、私から公へ」の歴史的な性格を併せもっている。自然現象ではない社会現象は、なんらかの形で人間が関与しているものだ。「権利保障の欠落」は当事者や関係者が行動を起こさない限り、そこは欠落したままの空白・真空スポットであり、何も存在しない。

エコールKOBÉの誕生は、欠落を埋めようとする岡本社長らの強い意志のもとに、「無」から「有」へと至った貴重な歴史的営みである。また、WAPコーポレーションという民間企業による運営であるが、その事業は公益性が高く、また障がい青年の高等部専攻科や大学等への進学を公的に開くことに寄与ないし発展するとなれば、「私から公へ」という歩みの途上にあるともみなし得る。

#### ❖各地域にふさわしい形で

「無から有へ、私から公へ」の営みには、苦難・苦労とともに、「夢」「希望」「喜び」がある。こうした歴史的事業に、ささやかでも志のある、できるだけ多くの人々が参加・参画してほしい。

前任校で「地域教育福祉」を論ずる際に、近江学園やびわこ学園の創設と、「この子らを世の光に」の言葉で有名な、糸賀一雄（鳥取出身、一九一四～一九六八年（二〇一四年は生誕百年））を「地域を創る教育福祉の起業家」と捉えなおして、彼の思想と実践を題材にして受講学生に起業を促したところがある（渡部「地域を創る教育福祉…『障害児教育原論』の授業実践」「地域教育学研究」3（1）、二〇一一年）。糸賀の人となりを表した「情熱を持った人間が歴史をつくる」という句（糸賀家から鳥取県に寄贈され鳥取県立図書館に所蔵されている掛け軸）に共感を覚えながらも、起業のリスクの大

きさに逡巡してしまう若者が少なくない。

仮に、当初から「福祉事業型『専攻科』」を立ち上げるためにWAPコーポレーションを起こしていたのであれば、起業リスクは軽減できたのか、その辺りをもう少し立ち入って知りたい。そして今後、兵庫県下に「福祉事業型『専攻科』」を広げていく際に、WAPコーポレーションが運営する事業、すなわちエコールKOBEBEのブランチ（たとえばエコールAKASHI）のような形で県下各地に展開することは可能なのか、についてもうかがってみたい。

いずれにしろ、呼称は福祉事業型「専攻科」か「学びの作業所」か、事業運営は社会福祉法人かNPO法人か株式会社かといったことに、変にこだわる必要はないだろう。それぞれの地域のニーズと実情に応じて、「権利保障の欠落を埋める」事業をまずは可能な形態で立ち上げ、障がい青年の自分づくりと二重の移行支援のための実践を全国各地に広げていきたいものである。

### 3 ↓ 創造と確信 — 実践報告の読み解き

#### ❖ 校風と伝統

「新設校の校風や伝統は、一期生とともにつくられる」——この実感は、鳥取大学附属に専攻科を開設

した経験による。

確かに、専攻科二年間の教育目的や教育課程の概要は、学生募集の際にすでに明らかにしてある。しかし、実際に一期生のメンバーが決まり、固有名詞をもった学生と職員が教室に集い、生活をともしするなかで、活動のイメージが湧き、題材が浮かびあがって、実践の具体化が進む。月日が流れ、季節が変わり、一年が経過すると、専攻科一年次の週時程やカリキュラム、課外活動や年間行事が定まり、前例となる（渡部二〇〇九、「一年目のカリキュラムと題材配当」三一―四三頁）。

二期生を迎えて、二学年の双方が揃うと、さらにダイナミックになり、実践も肉付けされていく。学年を越えた関係性が作用して、専攻科全体の雰囲気は醸し出される（同、「二年目の「教養」の実践例」六七―九六頁）。開設から二年を経ると、一年次と二年次の専攻科教育の内容がほぼ確定する。そして、一期生が修了していく頃には、専攻科に「校風・伝統」とでも呼びうるものが誕生しているから、不思議である。

エコールKOB Eも同様と思われる。いま、私の手元に三種のパンフレットがある。すなわち、①エコールKOB E設立準備室（二〇一〇年）『福祉事業型「専攻科」（学びの作業所）エコールKOB E』（二〇一一年春の開設に向けたパンフ）、②エコールKOB E（二〇一一年）『学校要覧』、③同（二〇一二年）『学校要覧』である。

エコールKOB Eの理念、事業説明、学習（訓練）プログラム、四学期制、時間割、開校までのスケジュールなど一四項目の概要が、すでにパンフ①で紹介されている。岡本社長らの思いが強く滲み出た内容であり、「卒業旅行＊二年目に実施。海外を予定」等の行事予定も記載されている（実際は

一部変更になることがあります」との注記は一応あるが)。

パンフ②は、河南学園長の挨拶、学園(事業所)の運営理念、教育(訓練)の重点、講義(訓練)プログラム、年間行事予定、時間割などが記載されているが、一年間の見込みであり、確定されたものではない。

その点、パンフ③には二〇一一年度の実践を踏まえた具体の記述やスナップ写真があり、確定的な日課と講義内容が紹介されている。実践の創造という点から注目すべきは、「三つの目標」であろう。パンフ①からすでに登場している「主体的に・豊かに・楽しく」という学びのモットーを継承し、パンフ②の学園長挨拶のなかでは「学生自身が主体的に学ぶ場」「豊かな体験と学びの場」「仲間と共に楽しく学ぶ場」という表現が使われ、パンフ③において「主体的に学ぶ」「ゆたかな体験」「仲間とともに」という「三つの目標」に結実している。「三つの目標」こそが、エコールKOB Eにおける実践の「三つの柱」なのだ。

本書は、職員集団が一期生とともに、「三つの目標」を志向するエコールKOB E独自の実践を創造し、確信を深めていった、まさに貴重な記録であり証言である。「三つの目標」が、そのまま本書の章立てにもなっている。原稿は推敲されて幾度も書き直された。そうして収録された実践はいずれも興味深い、なかでも二〇一三年三月末の検討会は、一期生を送り出したある種の達成感と解放感に溢れていた。

何度か原稿検討会に臨席できた幸運を活かして、私なりに実践を読み解いてみたい(ただし、あくまで草稿段階のものに依拠しており、本書に収められた最終原稿と相違している場合もある)。

エコールKOBЕの実践は、複数職員によって集团的に展開されている。一期生の二年間は、海老口恵子さんと吉川史浩さんに河南勝学園長も加わって、三名のもち上がりである。以下では、実践創造と本書実現の推進役を務めた河南学園長に焦点をあて、その青年像や実践観を明らかにしたい。

### ❖気分は大学生ゝ実践①

まず「気分は大学生」では、制度的には福祉事業なのだが、利用者を「学生」と呼び、短大のイメージであることを強く意識している。鳥取大学附属の専攻科でも、初期には「附養カレッジ」との看板や愛称を用い、「学生」と呼んでいた（渡部二〇〇九、二九〇三〇頁）が、現在では廃れている。エコールKOBЕは、福祉事業ゆえ逆に、「大学」「学生」へのこだわりがある。

「本当の大学に行って同じ世代の青年として対等に交流できれば」との願いが、開設初年度からさっそく、神戸学院大学や神戸大学とのキャンパス交流として企画される。キーワードは、「同世代を生きたる青年の自信と成長」であろう。

初回となった神戸学院大学との交流場面では、お膳立てから実際の交流へと描き込まれていく。大きな大学の建物↓控えの教室でオリエンテーション↓学生食堂で昼食↓講義への参加、そしていよいよエコールKOBЕの紹介と作文発表……。 「紹介を堂々としてくれました」「とてもしっかりと聞いてくれた」という文面には、はじめての交流がうまくいった安堵感もただよう。

神戸大学との交流について、私の司会進行による質疑応答場面では、大学生側がエコールKOBЕの学生たちに尋ねたくても遠慮して聞けないようなテーマ（たとえば「障害者手帳の利用」「自身の

苦手なところ」等）を、思い切ってぶつけてみた。河南学園長からエコールKOB Eに入学して半年あまりの学生の成長も伝え聞いており、ひるまず、臆せずに、堂々と答えてくれるであろうとの予感が、私にはあった。学園長を感動させるほどに、学生たちは実にしっかりと答えてくれたのである。二年目はもう少しハードルを上げて、大学生の卒論発表会と同様に掲示板やベルも用意して、ポスター発表を企画した。発表の際にはグループごとに質疑応答の時間があり、また終了時には、全体に向けて自らの発表を振り返る発言を求めた。自身を省察する営みと力は、エコールKOB Eの学生に限らず、自分づくりを進める青年期においては特に重要である。

## ❖自分の関心あるテーマで研究と実践②

見晴台学園は、一九九〇年に全国初の「学習障がい児の五年制高校」として開設された私塾である（渡部二〇〇九、一八〇頁）。その見晴台学園の教育課程は、三重県にある聖母の家学園、大阪のやしま学園高等専修学校、鳥取大学附属の専攻科にも影響を与え、引き継がれている。なかでも、「研究ゼミ」のインパクトは大きい。鳥取大学附属に関しては、「研究ゼミの発表―テーマに没頭し、みずからの探究を発表する」と題した報告（同、九二―九六頁）を参照してほしいが、「研究ゼミ」は鳥取大学附属の専攻科修了生への追跡調査において人気の高い授業科目であった。

エコールKOB Eにおいても、「大学のゼミのように研究して発表会をする機会を設定しよう」と、週一回の「研究ゼミ」が設けられた。河南学園長は、当初（入園した一期生の実態から推して）、「自分で学びたいというテーマが設定できるのか、一年間も通して継続した学びができるのか」という不安

を抱いていた。やがて、「想像以上に研究していく力がある」と感心し、そして「学ぶ意欲がある」と確信するに至る。

一期生が研究ゼミをやり遂げ、その発表会を見学することによって、研究ゼミのイメージをもつて入園する後輩も現れたという。一期生とともに「校風と伝統」はつくられる、その好例であろう。

#### ❖ドラマの連続「青春の学園」～実践③

圧巻は、「第3章 仲間とともに」に収められている「ドラマの連続『青春の学園』」である。個々の内面と変容が、仲間や実践との絡みで、活写されている。あたかもドラマ映像を観ているかのよう  
に、学生（たち）の姿が立ち上がってくる。そして、実践には不可欠な指導の意図が、リアルに読みとれる。

まず、「外食はあそこに行きたかったのに」では、すごく強い思いが前面に↓思うように決まらな  
い場面↓怒ったり泣いたり、また一方では、選択する際にずいぶん迷い決断できない、という学生た  
ちの姿が紹介される。そして、涙を見せながらも、自分が意見を引くことになった香さんを典型事例  
とすることによって、「自分の思いだけではうまくいかないこともあるということを学ぶ」、「友達関  
係のなかで自分の思いを抑えて折り合いをつけていくことを学ぶ」ということが、「大事な学習」な  
のだと強調される。

次の、「『ヒーローショー』をどうしてもやりたい」では、仲間がむしろテーマとなっている。我を  
通す健一くんをていねいに説得する学生自治会役員や、彼の思いを受け止める仲間たちが描かれる。

「仲間が意識され自分の感情をコントロールすることや人間関係を意識できるようになってきた」から健一くんにも変化が現れたと、読み取っている。

「彼に合わせて『もう一回はじめから』では、どっしり平然と受け応える職員たち、仲間の個性や特徴を理解し認めて相手に合わせることができるようになった一期生集団、自分の力で切り替えることができるようになってきている義治くんが描かれている。河南学園長は、義治くんの変化についても、「仲間に自分の個性を認めてもらい自分らしさを出してきた土台」があつたからだと分析している。第3章のタイトル「仲間とともに」が、ストンと胸に落ちてくる。

## 4 ↓ 青春の謳歌——神戸大学グループとの共同研究

### ❖ 共同研究

発達障がいのある青年は、特に競争的な日本の教育環境や制度のなかで、自らのできなさを感じる事が多く、自分に対する否定感をもつことが少なくないと言われる。本書では、学生のそうした姿の変容が描かれている。

ところで、学生たち自身は、エコールKOBÉでの学びや自らの変容をどのようにとらえているの

であろうか。そのことが知りたくて、二〇一二年度に、私たちは神戸大学の有志で「エコールKOB E共同研究」グループを結成した。

メンバーは私（教育学）のほかに、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の赤木和重准教授（発達障がい心理学）、川地亜弥子准教授（教育方法学）、木下孝司教授（発達心理学）と四名の大学院生たち（荒川千明、安藤未帆、近藤龍彰、坂本沙織）である。

私たちは、エコールKOB Eでの学びや生活を通じて、学生が不安や葛藤を抱えながらも自己肯定感を育むことができているのではないかと、仮説を立てた。そこで、テーマを「発達障がいのある青年における不安・葛藤を踏まえた自己肯定感の形成支援」とした。

## ❖ インタビュー等

個人を対象にした研究であるので、大学院研究科の倫理審査を経て、学園の教職員や保護者にもご了解をいただき、四名の一期生を紹介してもらった。学生にもきちんと説明し、理解を得て、以下のような調査を行うことができた（二〇一二年秋～一三年／実施者は院生諸君）。

### ① インタビュー調査

・エコールKOB Eに来てから、自分が変わったこと。

「エコールKOB Eは楽しいか／一番好きな授業は何か／高校（高等部）とエコールKOB Eとの違い／エコールKOB Eに通うことで自分が変わったところ／将来就きたい仕事は／等

・「えこーる新喜劇」について、自身がどのように参加し、どのように感じたのか。

「えこーる新喜劇」で何の役をしたか／何が楽しかったか／がんばったところや苦勞したところ／前回とくらべて上手になったところ／もう一回やるとしたらどんな劇や役をしたいか／等

## ② 発達心理学的調査

・およその発達心理学的状況を確認するために、新版K式発達検査の必要部分を実施した。

## ❖ 学生の変容く青春の謳歌

調査結果の詳細は、別途に論文化する予定であるため、ここでは概要のみを述べる。まず、「エコーK O B Eに來てから、自分が変わったこと」について、二人を紹介したい。

○高校にはあまり通えず「想い出」がないと言う広志くんが、「エコーK O B Eは楽しい」と話してくれた。具体的には、部活や得意な創作活動（工作や模型づくり）だ。部活は、身体を動かすのが苦手だったが、「無理かな」と思っていたサッカーがだんだんうまくなって、みんなからほめられるのがうれしいという。エコーK O B Eに來てからは、話の合う子もできて、気が楽になったらしい。就きたい仕事は、まだ決めていない。

○就職にまだ不安があったのでエコーK O B Eに來ようと思った由佳さんは、しんどくなったら「疲れました」といまは言えるようになった、と話してくれた。友達とのおしゃべりが好きで、自主講座や研究ゼミ、美術や音楽など、好きな授業もたくさんある。何でも楽しくやるポジティブな自分が好きだが、「まだまだだな」と思うところもある。将来の仕事は、自分にあつたところをゆつくり、時間をかけながら探したいなと思っている。

次に、「『えこーる新喜劇』について、自身がどのように参加し、どのように感じたのか」について、別の二人を紹介する。

○刑事役での拳銃ポーズが好きだと言う義治くんは、劇中でクリスマスツリーに変装して身を隠す場面が印象的だったらしい。じっと動かないよう「我慢することをがんばった」という。一年の新喜劇でも刑事役、二年も刑事役。次回も刑事役がやりたいのかと思いきや、今度は「探偵役をしたい」ときっぱり表明。最近観た「シャーロック・ホームズ」の映画に影響されたようだ。そんな義治くんが、エコールKOBÉから帰宅するときに、「この頃なんかいろいろ面白い物します」と話してくれた。学園から自宅に直行するのではなく、寄り道が楽しめるようになったということだろう。

○ヒーロー役がお気に入りの健一くんは、「新喜劇は楽しかったですか」と尋ねられて、「恥ずかしかった」と、意外な答え。どう言えばいいのか、どう動けばいいのか分からなくなったところが、「恥ずかしかった」という。友達といっしょにセリフ覚えをして、大変だったけど、覚えやすいセリフなら言えるようになったと、自分なりに省察している。「もう一度新喜劇をするとしたら、どんな役をしたいですか」の問いには、「やらないと思います！」との返答。その理由は、「卒業してしまうから」である（な〜るほど）。健一くんが選んだ仕事場は、早起きして通わねばならないところではなく、八時くらいに行けばよいところだという。根拠をもって自分にふさわしいところを選んでいる。

学生たちへのインタビューからは、エコールKOBÉの二年間が実にゆったりと流れている感じを受ける。「自己肯定」というには、大袈裟かもしれない。不安や葛藤がないと言えば、嘘になるだろう。

エコールKOBÉもあとわずかで修了なのだが、これまでのように競争にさらされ何かに追われているという風はなく、エコールKOBÉの日々を四人四様に謳歌しているさまが見て取れる。

## 5 ↓ 障がい青年の自分づくりと二重の移行支援

### ——エコールKOBÉの挑戦

最後に、エコールKOBÉの挑戦を、渡部二〇〇九『障がい青年の自分づくり』に改めて重ね合わせ、発展させてみたい。

#### ❖モラトリウムとしての青年期

「モラトリウム」（大人としての就労や納税の義務を免除された執行猶予の期間）に対して、ときに非難や揶揄の言葉が飛ぶ。高校（高等部）を卒業した後、働くことを先送りし、さらに学びを延長している青年に、「早く社会に出て、働き、税金を納めるべきだ」、「そのために自らを鍛え、スキルを磨き、しっかり準備せよ」……と。キャリア教育全盛の時代、教養を身に付け学問にふれるべき大学は、英語外部試験（TOEIC、TOEFL）、海外留学、インターンシップ、ボランティア等々、就活のためにスペックを貯める機関と化している。

就活は、三年生の後期から始まる。仮に四年生に先送りされたとしても、新卒一括採用の日本の風土のなかで、この時期を逃せば常勤雇用の道は閉ざされると追い詰められ、焦る気持ちは軽減されないだろう。何社挑戦しても入り口のエントリーシートではねられ続けて、一歩も前に進めないと、次第に落ち込む。就活に失敗してうつになり、なかには自殺する若者もいるという。

ところで、動物は成体か否か（仔が産める成熟か否か）の二区分で事足りるが、人間には「青年期」がある。「青年期」という人生区分は、古代・中世から見られたらしく、たとえば「幼児*infantia*（七歳）—子供*pueritia*（一四歳）—青年*adolescencia*（二八歳）—若者*iuventus*（五〇歳）—熟年*gravitas*（七〇歳）—老年*senectus*」といった区分があつたという（寺崎弘昭「かつて大人は若者だつた—中年の時代のために—」二〇一二年一月一四日、神戸大学発達科学部での講演資料／イシドルス（五六〇年頃—六三六年）『語源[Etimologiae]』）。

とはいえ、貴族や武士などの支配階級を除く庶民にもあまねく「青年期」がもたらされたのは、近代以降である。すなわち、児童労働を禁じて代わりに教育保障を謳う工場法（英国一八〇二年、日本一九一一年）ができ、実際に学校教育体制が整備されてからである。すなわち、労働者階級の権利（とりわけ学ぶ権利）保障運動の進展により、成体になっても労働を猶予する「モラトリアム（＝教育保障）期間」として「青年期」は拡充されてきた。その意義を再認識し、ゆつくりじつくりと学び、「自分づくり」を進めることのできる「青年期」を保障すべきであろう。「モラトリアムとしての学びの復権」と言ってもよい。

## ❖青年期は健常者の専有物？

ところで、障がい者に青年期は「ない」または「必要ない」との観念が、ながらく支配的であった。障がいの重い者は「永遠の子ども」として扱われ、軽い者は「早く手に職を」と急かされてきた。

日本の場合、権利としての九年の義務教育保障体制が整備されたのは一九七九年（養護学校教育の義務化／障がい者の「教育を受ける権利」保障に係る第一のうねり）であり、兵庫の「ひゅーまんばいす」と同様な運動の全国展開によって、訪問教育対象者を含む希望者全員の高等部進学が実現したのは、二〇〇〇年（二〇世紀の最終年）であった（第二のうねり）。日本において私たちは、希望する障がい者に一二年間の学校教育を保障する仕組みを獲得した上で、二一世紀を迎えたのであった。健常者の専有物であった青年期を、障がい者においても保障しうる枠組みをようやく整えることができた。

しかし、一八歳までという制約つきである。山田洋次監督の映画『学校Ⅱ』（一九九六年）のラストシーンで、西田敏行が演ずるリュー先生が「……なんで卒業なんかするんだ、もっとここにいろよ！……」と涙ながらに訴える状況は、いまも変わっていない。

二一世紀に入って広がっている高等部（高校）修了後の学びの保障運動は、障がい者の「教育を受ける権利」保障に係る「第三のうねり」とも言えよう。それは、高等部（高校）専攻科づくり、大学など高等教育機関への進学、専門学校（専修学校専門課程）や各種学校での学び、そして福祉事業における学びの実現など、多様な経路で拓かれつつある。この「第三のうねり」の一環において、とり

わけ神戸周辺エリアにおける「権利保障の欠落を埋める」ために、エコールKOBÉは立ち上げられたのである。

### ❖就労を急かし、競わせる学校現場

社会的にせっかく獲得した青年期ではあるが、いま、「キャリア教育」が日本の学校教育現場を席卷している。学校は人材養成・人材確保の場とみなされ、就労を準備する機関としての位置づけが突出する。

宮原誠一（教育学者、一九〇九～七八年）は、かつて、「われわれの社会では、青年は社会によって青年期をあたえられながら、社会によって青年期を台無しにされている」（『青年期教育の再編成』『岩波講座現代教育学16 青年の問題』岩波書店、一九六一年、三一三頁）と述べたが、今日の日本では、「学校教育（キャリア教育）によって青年期が台無しにされている」という状況にある。「学校教育による青年期疎外」と言ってもよい。

キャリア教育とは、本来は「キャリア発達を保障する教育」を意味し、自らの人生や生き方、それらに関わる価値をつくっていく教育のはずである。にもかかわらず、「仕事に就くこと」のみを強調し、「就労一辺倒」の追い込み指導または放置放任の自己責任により、就労を急かし、競わせるものに堕している。

## ❖エコールKOB Eの「学び」にある人生観・自立観

吉川史浩さんは、「主人公は『自分たち』」の項で、「……エコールKOB Eの学生たちの年代は青年期の真ただ中の年代です。どんどんと世界が広がり、世の中を知っていく（べき）時期だと考えています。したがって、本当の自由を保障し、自分たちの満足のいく自治をつくっていくことが重要だ……」と書いている。「野外活動の行き先、土曜登校の内容、さらには学園のルールでさえも学生の話し合いで決まっています。まさに学生がつくる学園です」、「これが学びたい、してみたい、という気持ちを大切に、職員は『じゃあ、やってみようか』と、その気持ちをサポートする立場です」とも述べている。

吉川さんの「『ツリーイング』冒険に挑戦」のベースには、「極論ですが、人間には冒険が必要だ……」という冒険観がある。「スポーツの力」の項では、「我々の生活に欠かせないスポーツ」という切り口から語り始めている。彼は、「スポーツには人を元気にさせ、活力（生きる力）を与えてくれる力があります」、「スポーツは人間にとって不可欠なもので、生涯触れ続けておくべきもの」というスポーツ観・人生観を大切に、「スポーツって楽しい！ スポーツしたい！」という気持ちを育むことをねらいに取り組んでいる。

また吉川さんは、「失敗」について、以下のように語っている。すなわち、「心の成長には成功体験は大事ですが、人生のなかには成功もあれば失敗もあります。……失敗したら悔しいけど人生の終わりではない。もう一回やってみたらいいじゃないか……。『あーあかんかった。よし！ 次や次！』

という意識を、スポーツを通じて育むことができれば、それだけでもスポーツの意義はありそうです」と……。

鍛錬して、「強い人間」を育てようというのではない。「弱さ」を併せもって、それでいいのだ。浮き沈みのある人生を前向きに生きていけるよう、青年期に揺れ動きをむしろ教育的・意図的に組織している。やってみたいと思い、やってみようかと足を踏み出す。ダメでもドンマイ、「よし！ 次や次！」という生き方を、伝えようとしている。

海老口恵子さんは、「自分たちで話し合い、取り組んだ調理実習」の項において、「これまでの日々の活動を通していっしょに考え、笑い、泣き、時には本気で腹を立て……。そんな数々の出来事からお互いに認め合い、苦手と得意が分かり合い、キャラクターをわかり合えるようになってきた」という集団的な変容の上に、二年生後期の「一人調理」が成立したことを述べている。「一人で行動することは誰でも不安なもの」、「助けてほしいときにすぐそばに誰かがいるという安心感」という文章をまとめに置くことによって、仲間とともにある自立、誰かとともにある自立を語っている。すなわち、不安につき落としたり、孤立を強いることではない、「ともにある」という自立観が提示されている。それは、選択講義を扱った「二年目から始めた選択講義」の項で、「ただ黙々と作業をするだけでなく、……『やってみようかあー！』を『みんなでやってみようかー!!』と仲間とともにする経験がこの青年期に少しでも多く体験してもらいたいと願っています」の言葉にも、表れている。海老口さんは、一期生を送り出した後の三月末の検討会において、「おだやかに生きる幸せ」「ともに生きる喜び」を伝えたかったと、この二年間を振り返っていた。

私は、エコールKOB Eの諸実践に、本来の「生き方」教育の可能性を感じずにはおれない。エコールKOB Eの挑戦は、青年期における「自らの人生や生き方、それらに関わる価値をつくっていく教育」とは何か、ということに実践的な裏付けと示唆を与えてくれよう。

#### ◆青年期の自分づくりと二重の移行支援

私は、『障がい青年の自分づくり』の本の副題を「青年期教育と二重の移行支援」とした。出版から五年が経ち薄れかけていたその意義を、エコールKOB Eの挑戦は再び意識化させてくれた。

青年期の移行（トランジション）を語るとき、多くの関係者は、「学校から仕事（就労）へ（Transition from School to Work）」を使うか、イメージしている。しかしこれでは、「就労一辺倒」の移行問題に陥ってしまう。『障がい青年の自分づくり』では、OECDのトランジション研究を参考にして、「一〇歳台半ばの思春期から二〇歳台半ばまでの約十年におよぶ長期的で持続的な移行支援」を提起した。その際に留意してほしいのは、第一に「学校から仕事へ」とはせず、「学校から社会へ（Transition from School to Society）」という用語を使っていることである。第二に、それに「子どもから大人へ（Transition from Childhood to Adulthood）」を結合した形での、『二重』の移行支援の提示になっていることである。『二重』の移行支援」としたのは、OECDではなく、私独自の強調法である。

しかし、両者が並列併置であるとか、「学校から社会へ」の方が重い位置づけであるかというところではない。青年期は、青年期特有の不安や葛藤、揺れ動きのなかで、「かけがえのない自分」をつくる期間である。そうであれば、青年自身の「自分づくり」を応援する「青年期教育」が移行支援

の中核をなさねばならない。その意味では、やはり「子どもから大人へ」の移行支援が基盤となろう。特に、自己肯定感がもちにくいとされる発達障がい青年の場合には、そうすべきだ。

加えて、子ども年齢の一八歳を過ぎて、成年（日本では二〇歳）を迎え、成人になっていく、二〇歳前後のこの時期に特有な「青年期教育」の課題があるのではないだろうか。私は、それを「意図的な脱学校化＝学校臭さからの脱皮」と考えている。その意味では、「学校から社会へ」の移行支援をどのように豊かな内実を伴って結合させるのが、ポイントとなろう。能力もスキルも高いからと一八歳就労の対象とされがちな発達障がい青年にこそ、成年を迎えるこの時期における青年期教育と二重の移行支援が必要なのだ。

エコールKOBÉは、就労移行を直接の目的とはしていない。福祉事業のなかの、「自立訓練（生活訓練）事業」の制度枠組みに依拠している。学校ではないので、学習指導要領の制約もなく、文部科学省や教育委員会のキャリア教育政策からもまったくフリーである。それらのことが逆に、「就労一辺倒」の大波から青年たちを守り、青年期における「自らの人生や生き方、それらに関わる価値をつくっていく教育」を切り拓く、自由と余地を与えてくれている。そして実践的にも、学校臭さから意識的に抜け出て、社会のなかで学んでいくという方向に青年をいざなっている。

「障がい青年の自分づくりと二重の移行支援」を目的とした実践の創造と展開には、福祉事業である「自立訓練（生活訓練）事業」がむしろフィットしていると思われる。「学校法制に乗らない福祉事業だからこそ、学校（専攻科や大学）にはない意義と可能性がある」と、逆説的に一応の結論づけ（新たな仮説づくり）を行うことができよう。今後の共同研究における、さらなる検証課題としたい。

なお、文教行政として学校型の高等部（高校）専攻科を増設整備するという政策を採っていない現時点では、学校型専攻科と「福祉事業型『専攻科』」ないし「学びの作業所」の双方を連結させた「ハイブリッド方式」によって、ここしばらくは「障がい青年の自分づくりと二重の移行支援」の実践と仕組みをつくっていく必要があるだろう。

（わたなべあきお・神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）